

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No. 5
2009.10



図書館と美術展

国際関係学部 国際交流学科
教授 神山 眞理

日本で初めての国際関係学部が三島のこの地に創設されて、今年には30周年の記念の年である。節目があるということは、私たちの生活にとっても組織にとっても、流れがちな日常がリセットされ、それによって活性化されて良いことである。これを機会に、ふと立ち止まってここまで来た歴史を振り返り、忘れていた懐かしい事柄を思い出して、さてこれからとは未来に夢や希望を持って、今の立ち位置を確認することが出来る。思い起こせば、30年で世界も様変わりしている。

1979年、学部が創設された年の10月、日本大学国際関係学部図書館が国連寄託図書館として国連本部のダグ・ハマースホルド・ライブラリーから指定された。同年から、OECD（経済協力開発機構）が発行する各種統計及び報告資料も所蔵されている。その6年後の1985年にEC資料センターも欧州委員会より指定された。2000年には国際協力プラザコーナーも出来て、国際関係を学問とする国際関係学部に対応しい環境が整っていった。当時の教職員の方々が、その発展に尽力されたご努力はいかばかりかと想像すると感慨深いものがある。学生達も国際社会の中の日本を意識して、世界を考えていこうと希望にあふれた活気があるキャンパス作りの時期であったであろうと容易に想像できる。その頃の学生が今では国際舞台で活躍しているのを見聞きすると喜ばしい気持ちになる。現在は、その先人たちの基盤の上に立ち、学生達も在学中に海外の大学に様々な形で留学する者が増え、その経験を生かして卒業後へと繋がっていている。

私が非常勤講師として教壇に立った1980年は、まだ三島学園という名称が残っていたが、このキャンパスの歴史とともに、教育と自分の研究の発展を歩んできたひとりである。芸術（美術）が専門であるので、若い頃から世界の美術館や国際展を見続けてきた。私にとっては、美術館、博物館、図書館の三館なくしては研究や作品制作をすることは出来ない。美術館・博物館で記憶に残っている最初の展覧会は、1958年に東京国立博物館で行われた、今でも語り継がれている、優品揃いのファン・ゴッホ展である。もう半世紀も経ってしまったが、あの感動は今でも忘れられない。その時、本物の作品に対峙した心の揺れをいつでも思い出すことが出来る。

また図書館の最初の記憶は、図書館とは呼べない小学校の図書室である。そこで、たまたま手に取ったハワード・カーターがエジプトの王家の谷でツタンカーメン王墓を発見した時の発掘記を読んだ時だった。その発見に至るまでの紆余曲折と高揚感、墓を開ける瞬間の緊張感から、さまざまな副葬品の数々。3千年以上前、王のためにこのようなものを創り出したのかと、以後エジプト美術に興味を抱き、エジプトの王家の物語やピラミッドの構造を書いた本をいとおしむように読みふけた。いつかエジプト考古学博物館に行ってみよう、カーターが発見したツタンカーメンの黄金のマスクを自分の目で見てみたいとずっと思っていた。その後数年で、東京国立博物館で「エジプト美術5千年展」（1973年）が開かれ、その後「ツタンカーメン展」（1975年）も開かれた。それらをこの日本で見る事が出来る機会を得た。本から知って思い続けたエジプトに、やっと思行事が出来たのは院生の1年の夏だった。40度以上の炎天下を歩き回ったエジプトは想像通りであった。しかし、世界最大の建造物と言われるクフ王の四角錐のピラミッドは、砂漠にくっきりとした濃い影を落とし、本からは想像することは出来ない大きさであった。



▲ 旧フランス国立図書館での美術展

次項に続く▶

そうやって、さまざまな画集や美術本を図書館で見ることになって、図書館は居心地の良い、プライベートな時間を過ごせるところとなった。特に美術の大型本は、高価なので、学生の身にはとても手が出なくて、自分で美術全集が買えるまで、本当によく図書館のお世話になった。また、美術本は印刷の関係で厚くて上質の紙を使用しているため、たいへん重く、そういう意味でも図書館に自ら通わざるをえなかった。最近でこそ、美術館の図書室が充実してきて、ビデオライブラリーと共にかなり専門的な研究が出来るようになってきたが、総合図書館で閲覧する雰囲気とは全く違う。

そういう経験の中で、その三館が一緒になった取り組みを二つ紹介したいと思う。ひとつは、グリム兄弟博物館があるドイツのメルヘン街道、ヘッセン州カッセル市で5年に一度開催される国際展であるドクメンタ展での取り組みである。現在、1年に100を超える現代美術の国際展が世界で開かれているというが、その中にある世界の最新の美術の動向を示す最も重要な国際展である。

州から約半分の出資を得て、展覧会のための有限会社が企画・運営しているというめずらしい開催スタイルで、街中の様々な場所を会場に使って開催され、世界中から多くの美術関係者、美術ファンが訪れる。メイン会場はドクメンタ展専用ホールとフリデリシアム美術館であるが、その他に、城、博物館、図書館、駅舎、オフィスビル、地下街、商店街、ビール工場、倉庫、公園と街中の施設を使い、とても1日では見て回することは出来ない。いわゆる美術展というイメージとはまったく違う、地域と一体になった展覧会である。会場のひとつである図書館では蔵書を動かすことなく、広い空間を生かして映像展示やインスタレーションの作品が展示される。鑑賞者にとっては図書館独特の本の香りがある場所で、展示作品に知的なイメージを付け加えられる。図書館を利用している人も、その中で美術作品を鑑賞している人も、静かに、実に自然に振る舞っている。

かつてナチス美術品略奪部隊は、ヨーロッパ中から略奪した65万点にも及ぶ美術品を分類し、モダン・アート作品を特に頽廃芸術として見なした。その名誉回復のために始められたドクメンタ展は、戦後ドイツの芸術の復興を掲げ、地域の活性化に成功し、出品作品の数、質とも、世界の国際展を牽引している。

もうひとつはフランス国立図書館旧館を会場にした、世界的に活躍している現代美術家の展覧会である。

ミッテラン大統領のプロジェクトであるグラン・プロジェのひとつとして、国立図書館が西欧と東洋の写本室やメダル博物館、特殊部門だけをリシュリュー通りの旧館に残し、セヌ川の左岸トルビアク地区に出来た新図書館に引っ越して、蔵書もほとんどが移管された。19世紀後半に建設され、学者や研究者が足しげく通った旧館の重厚なドーム型の印刷本閲覧室はすっかりがらんとしてしまったが、2008年にそのスペースを利用したソフィ・カルの展覧会が大々的に行われた。カルは手紙(時にはメッセージ)を、世界の多種の職業の人たちに送り、それを受け取った人がその手紙を読み、ソフィに対して映像で訴えるという現実と非現実の出来事を倒錯させるような展開の作品で、1人1人のメッセージが閲覧室の個々の机にそれぞれ置かれたモニターの画面から、映像と音楽や声、物音で語りかけてくる。それはあたかも、かつてそこにあった蔵書の究極の姿でもあるようで、図書館として長年使われて来た知の空間に相応しい展示となった。

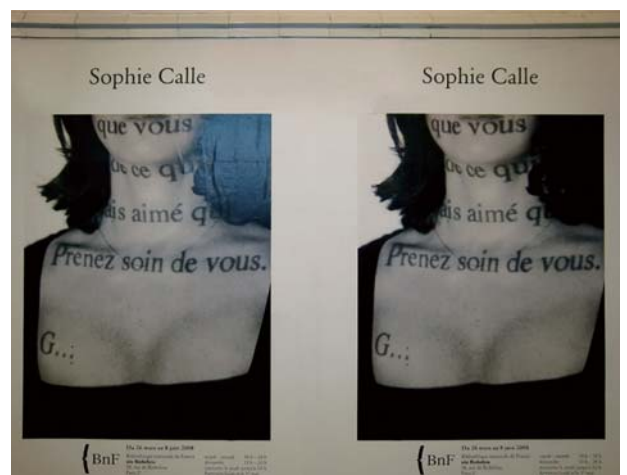
現代美術の作品展示は、ドクメンタ展がそうであるように、一般的に美術品が展示される美術館の空間に、あえて展示されないことが多々ある。それは、既成の空間を使わないことにその作品の意味がある場合と、現実的に美術館の空間に入りきれないとか、設備の上で展示することが出来ないとかという、いわゆる

絵画や彫刻の枠をはみ出した作品が多くあるからである。それだけ、表現が多様になったといえるのであるが、展覧会そのものの運営の仕方が、さまざまなスタイルをとるようになったことで、都市という大空間を美術品の展示場と考えて、対話型のアートを構築することを目指したり、誰もがアートに接して参加できる機会を作ることも目的とするようになったからである。

このような事からもわかるように、美術作品は今や街なかに進出して新しいスタイルの発表展示をしながら、街にとけ込むものとなって来た。美術館も図書館も情報のサービス機関と考えれば、世界の大美術展や歴史ある図書館がそうした場に提供したように、これからは、美術館、博物館、図書館がそれぞれ独立した機能を高めつつも、その様なことが節目になって、一方では一体になるような取り組みがますます進められていくのではないだろうか。



▲ 旧フランス国立図書館閲覧室を美術展会場に



▲ メトロの駅に貼られた旧国立図書館での美術展ポスター

古い本の匂い

国際文化学科 西田 司

ESSAY

久しぶりにその匂いを嗅いだ。ひょんなことから自宅の仕事場がなくなり、頼まれた記事を書くために、去年の夏休み町の図書館に通った。そこに、懐かしい匂いがあった。臭いと言ってしまうまでもうだが、セピア色の匂いといえば、気取りすぎか。30数年前、院生として過ごしたミネソタ大学でよく嗅いだ匂いがそれだった。

本格的な図書館との出会いがミネアポリス・キャンパスのメイン・ライブラリーだったということもあり、今でもその図書館について二つのことを鮮明に憶えている。

毎学期、年4回、授業の始まる最初の週が学生にとっては勝負の週である。これは、図書館についても言える。履修する科目の教科書と、読んでおくべき参考図書が発表されるやいなや図書館に駆けつけ、借り出してしまふ。そして、その学期の期間中、それらの本を家においておくのである。長く借りておけないものは、早く読むか、必要なところをコピーしてしまう。これをしないと、いい成績は取れない。これをしてもいい成績が取れるとも限らないが、しなければ、ぜんぜんいい成績は取れない。

借りるのは、3科目履修するとして、30~40冊くらいである。段ボール箱を車に乗せて行って、それにどさっと入れて帰るのである。まずこの競争に勝たなければ、その後の競争に勝つのが難しくなる。図書館は、学生が必要とする本は同じ本を数冊並べていたので、そんなことができた。

博士論文を書き始める頃、図書館は館内に専用のスペースを提供してくれた。キャレルという、鍵のかかる自分専用のスペース

である。特別なことではなく、それ相応の理由があれば、だいたい与えてくれた。タテ、ヨコ、それぞれ2メートルくらいのスペースで、金網で囲まれていた。中は丸見えで、机とイス、本棚が納まっていた。

キャレルには、私物を置いてもいいし、図書館の本を置いてもよかった。先行研究をするときには、これがありがたかった。本を読むのはたいてい、空いているソファや机を使い、このスペースには、借りた本を置いておいた。そうすることによって、借りるたび、家へ持って帰る必要がなくなるのである。図書館には、机の上に何十冊もの本を積み上げているキャレルがたくさんあった。

キャレルは機能的であり、学生への便宜という意味でもすばらしいサービスだと思うが、見た目はちょっと変である。というのは四方を金網で囲んでいるので、一見、何かを閉じ込めているように見える。本がなければ、全体が見えるから人だとわかる。しかし目いっぱいの本を積み上げていると、中にいる人の顔だけ見えたりする。そうすると、二枚目ならともかく、そうでないとサルか、何かの動物に見える。ひどいときは、目だけ見えたりする。滑稽である。

開館時間の長いことだけでなく、レファレンスや文献の取り寄せなど、図書館のサービスにはずいぶん感謝した。キャレルを掃除して返却したときは論文も先が見えた頃で、古い本の匂いに囲まれた生活も終わりを迎えた。

図書館と知識と邂逅

商経学科 佐藤 聡彦

ESSAY

知識を満たすための施設を利用することで、人との交流を密にできることを読者の皆さんに伝えたい。そこでアメリカで図書館を利用した時の経験を一つ紹介する。

私は図書館を利用する時、一ベッド一晩幾らというホステルをよく利用する。こういう場所では、安心できる社会的距離を取るため、同室の者同士が互いに声を掛け合って人物確認するのが通例である。

シカゴのホステルでは40代半ばのドイツ人に声を掛けられた。私と同室になったその彼は、工作機械を扱うエンジニアだと言った。彼はドイツで、新聞記事に偶然自分と同じ姓を持つアメリカ人を見つけ、自分との関係の有無を知りたくなり、またちょうど長期休暇が取れたので、観光がてらその記事にあったシカゴに来たということだった。そこで私は、アメリカでは自分の出自を気にする移民の子孫が多く、ジニーロジー (genealogy: 系図学) が人気であり、資料もそれなりにあると教えた。そしてこれから図書館に行くので一緒に行こうと彼を誘った。

図書館の入り口に着いた時、彼には図書館司書に先の事を伝えると適切なアドバイスが得られると教えてから、私は自分の調査に向かった。その日の閉館時間に、私は会う約束はしていなかったが彼とまた会った。そのとき彼は、同じ姓のアメリカ人が各所に散らばって存在していること、今回ではそのうちの一家族さえ実際に会うことは難しいことが分かったと言った。そして彼らが自分の一族と関係あるかどうかについてはドイツに帰っても調べていきたいと

言った。司書も彼の質問に懇切丁寧に答えてくれたと喜んでいて。そして真顔で「色々アドバイスしてくれたのはありがたいが、君はなんでそんなことを知っているのか」と聞かれた。私はそのようなことを一時調べたことがあり、また興味もあるということは、彼が初めて私に訪米の目的を話してくれた時にも説明してあるにも関わらずであった。彼は旅先で出会った一東洋人が、彼の疑問に適切に答え、また彼の職業も理解したことに驚き、また図書館内でも図書館司書の対応が私の説明通りだったので更に驚いていたのである。ヨーロッパ大陸の人にしてみればやはりアジアは別世界だということだろうか。そして彼は、もっと質問したいから友達になってくれと言ったが、私は「いや、専門ではないからこれ以上は知らない」と断った。それでも彼に好かれてしまい、休日日には、同室だった二十歳のオーストラリア人も付いて来たシカゴ観光の案内をさせられた。この時、歴史的建造物や近代建築を主に案内したので、バスから来た若者には退屈なようだった。

相手の関心を得るには、自分が知的であると見せるのが有効である。自分より知的な人と友人になりたい、または付き合いたいという考えはどこの国の人にもあるが、日本以外ではもっとその考えが強いと、私は経験上感じている。反対に知識が無いと見られると声も掛けてもらえない。もちろん単に話をするだけでなく、何かを主張するときでも知識を持っていることが有効な戦略である。皆さんも知識の源泉となる図書館をもっと利用しよう。もちろん蔵書資料は大切に扱おう。

朗読の愉しみ

社会人聴講生 杉村 茂美

STUDENT'S VOICE

『愛を読むひと』という映画を観て来ました。原作はベストセラーになった『朗読者』です。舞台は1958年、ドイツ。若者は初恋の女性に、本を読んでくれるよう頼まれます。青年は愛する女性のために朗読をします。しかし、ある日突然、女性は姿を消してしまいます。十数年後、監獄の中の彼女のために、思い出の本をテープレコーダーに録音し、声を届け続けます。まさに「朗読」が主人公の映画でした。

私事で恐縮ですが、10年前、夫は重い病気に罹りました。定期的に、数時間に及ぶ点滴を打たなければなりません。3時間もベッドの上で動けず、天井を眺めたり、目を瞑ったりして時間が過ぎるのを待つだけでした。とても辛そうでした。

何かできないか、考えました。「そうだ、本好きの彼のために朗読はどうだろう。」その旨話すと、読みたい本があり既に購入してあるが、集中力がなくまだ手付かずとの事でした。

早速、次の点滴の時から読み始めました。本は加賀乙彦の『高山右近』。静かに、ゆっくり、丁寧に読んでみました。間もなく「スー、スー」と規則正しい寝息が聞こえてきました。ほっとしました。すぐに止めずに、しばらく読み続けました。点滴が終わり目を覚ました夫は「悪かったね。眠っちゃったよ。」と、ちょっと申し訳なさそうに言いました。その後も、点滴の度に続きを読みました。

4人の子供達が幼かった頃、お布団の中で本を読んでもらうのを楽しみにしていました。リンドグリーン作の『やかまし村の子どもたち』も、そんな就寝前の1冊でした。この本の中に、年を取ってほとんど目が見えなくなったおじいさんのために、やかまし村の子どもたちが新聞を読んであげるシーンが出てきます。子どもたちに囲まれて幸せそうなおじいさんの挿絵も付いていて、とても心温まる、印象的なシーンです。

さて、あなたのお家には、新聞が読み難くなったおじいさんはいませんか。おばあさんは、寝つきが悪くて困っていませんか。まだ字が読めない、小さな御子さんはいませんか。クリスマスや記念日のために、ちょっとユニークな贈り物を思案中の方はいませんか。

文字を、あなたの声に変換してみませんか。無機質な文字に、あなたの声で命を吹き込みましょう。心を込めて読めば、聞き手は勿論、読み手のあなたも、とても楽しい時を過ごせること請け合いです。豊かで幸せな時間と空間を、あなたと大切な人と共有してみませんか。



刊行物紹介

WRITTEN BOOKS

『国際貿易理論小史』

小林 通著 [時潮社]



前著書『国際分業論前史の研究』は、古典派貿易論研究への第1歩としての出発点をなすものであった。本書は、17世紀から18世紀にいたるイギリスにおける国際貿易論を取り扱い、その段階を継続すると同時に1歩前進させ、論理的展開でもより古典派の基礎的真髄に接近している。

古典派経済学以前の理論が、いかにA.スミス、D.リカードなどの理論構築のためにその時代の遺制やカオスの中から自由貿易の基本的命題を提唱して、古典派経済学の一連の理論的萌芽にそれを継承させ、開花させているのかについて捉えている。

『江戸明治 唐話用例辞典』

小田切 文洋 編著 [笠間書院]



唐話という言葉は聞き慣れないかもしれない。江戸時代、話し言葉系の中国語を指した言葉である。中国人を祖先に持つ長崎の通事や隠元禅師で有名な黄檗僧たちが、まず中国語の発信源になった。知識人の中には救生徂徠のように中国語の習得に熱心な人たちがいた。中国語の理解が人々に広がると、『水滸伝』の魅力に引きつけられていった。『水滸伝』の翻訳や翻案、さらには辞書が生まれる。水滸熱が中国語の日本語への浸透を加速させ、文学作品にも積極的に用いられていく。本書は、江戸から明治初期にかけての唐話受容の重要性を鑑み、これからの研究の基礎となる用例を精査したものである。



『ブルーザーのキス』

原田 真人 著 [ランダムハウス講談社]



ベースになっているのはロスに居住しているころ書いた英語脚本の"Bruiser's Kiss"です。

ジャック・ロンドンからジェームス・エルロイに至る、秀逸なポクシング・バウトを書き残した作家たちへのオマージュを暗黒小説とクロスさせて冒険映画に昇華させたい、と願ってのことでした。

舞台はシカゴからカンザス・シティを経てテキサスに至るコーン・ベルト。これだけ密度濃く多彩なアンダーワールド・アメリカナのキャラと言葉を書き込んだ日本人作家はいないと思うのですが、書評は限りなくゼロに近い。やはり、映画監督が片手間に書いた小説と見られてしまったんでしょう。

『イギリス家族法と児童保護法における子の利益原則』

東 和敏 著 [国際書院]



イギリスでは、児童保護法と家族法の法領域で、前者については1601年救貧法、後者についてはほぼ19世紀の後半に完成した、エクイティ裁判所における親子法原則の修正を通して、子に対する社会的保護と家族関係における利益保護の確保に努めてきた。1948年、救貧法が廃止され、350年近くにわたって、主に労務場をその場として進められてきた、貧困家庭の救済、そこに生まれた子の経済的救済、職業的訓練を目的とする政策が廃止された。同じ年、「子の最善の利益」を新たな理念とするイギリス児童法が成立している。1989年には、家族法関係において、子の利益こそが「至高の考慮事項」であるとする原則を、イギリス児童法第1条が規定した。

規制の対象、目的実現の方法とも異なる法体系ではある。しかし、両者は、ともに、子の利益実現へと向かう経過を辿ってきた。本書ではこの過程を追い、その結節点ともなった現代法の構造を明らかにすることを試みた。

『ブランド・コミュニケーションと広告』

兩宮 史卓 著 [八千代出版]



近年では、マーケティング戦略の中で、ブランド・マーケティングという新たな領域が築かれている。その活動がブランドを基点として行われ、ブランドを構築・育成するための活動であるとするならば、広告もブランドを中心として行われるコミュニケーション活動としてとらえなくてはならない。

そのため、本書は広告戦略とブランド・コミュニケーションに焦点をあてる。既存のマーケティング戦略における広告は、商品告知や販売促進を目的としていた。しかし、ブランドとは顧客が多数存在することにより、初めて相対的なブランド価値が向上する。ブランド・コミュニケーションも顧客との相互関係の中で、ブランドを育成させることを考え方の支柱としている。

新版『伊豆国田方郡丹那村川口家文書目録』について

伊豆学研究会理事
橋本敬之

昭和45年、川口家文書を当館が寄贈を受けて以来、同56年に目録が刊行された。この目録作成の経緯と川口家文書についての第一報は、『ピブリオテカ 第1号』に掲載した。

さて、56年に刊行された目録には近世の史料を中心に1,648点が収録された。今回作成した目録では総件数では近世のもの3,249件、近代のもの352件、合わせて3,601件となった。このように収録件数に大きな違いがあるのは、当時、寄贈者に対して、早く刊行し内容を知らしめる必要があったからと考えられる。私達は内容を知ることができたため、目録を利用して、静岡県史や自治体史の史料として多くを活用させていただいた。

今回、再度目録作成するにあたっては、静岡県史で行った分類に従って、通し番号と分類ごとの子番号の記載で全容がわかるよう工夫した。また、1点1点史料封筒に入れ、散逸しないようにするため、同一封筒に入れた方がよいと判断したものについては、一括しながら、整理を進めた。整理作業については、考古学の発掘のように発見したときの姿をとらえる必要があるとの見解もあるが、考古学資料と違い、おそらく現在に至る過程で保有者が何度か整理の手を加えている可能性が高いので、それは意味をもたないものとする。今回、史料整理が完了したので、分類ごとの概略を記しておこう。

近世の分類は、A支配関係からK宗教・身分関係史料までと、それに加えX家関係、Zどここの分類にも属さないその他の項目を作り、明治5年までを区切りとした。明治5年は版籍奉還により、近代的な所有関係が始まる時期と捉えているからである。近代は内容を知ることができる分類を適宜作成した。今回は行政・土地などに分類して、それぞれを年代順に並べた。

近世A支配関係に分類したのは532件で、特筆すべきは、川口家の地位である。江戸時代のはじめは幕領で三島代官の支配を受けたが、元禄11年(1698)旗本酒井氏の支配地となった。酒井氏は丹那村をはじめ、下畑村など伊豆では6か村を支配し、川口家は旗本酒井氏の伊豆支配の要となった。在地代官としての役割を担ったため、多くの廻状や手紙類が残る。Bは検地帳をはじめ土地関係史料で45件を数える。C貢租関係は730件あり、川口家文書の5分の1超である。史料の多くは年貢割付状・皆済状である。年貢割付状は寛永19年(1642)から、以後累年にわたり、ほとんど残されている。寛永19年は三島代官に伊奈忠公が着任した年で、伊豆全域の支配を確立した時期である。この割付状から領主と対峙した結果の年貢の引きの記載を確認でき、ここから災害などの様子を知ることができる。原史料を確認しなくても目録上で調査できるよう、目録には詳細な内容を記載した。また、調査者の恣意的な目録にならないよう配慮し、できるだけ内容がわかるような目録作成を工夫した。年貢割付状からさまざまな情報を得られる。貢租関係史料は、丹那村のものばかりでなく、6か村のもの残り、年貢以外にも村役関係も見ることができる。

D村制・戸口関係史料として、江戸時代の村の様子が見られるもの、村の財政や戸籍関係のものを集めた。寛政7年(1795)

以降の宗門人別帳が残り、これにより丹那村を中心とする人々の移動の様子を知ることができる。また、村入用帳が残り、これにより村運営の様子を知ることができる。E産業関係史料では、農業経営と農間余業といわれるものを集めた。江戸時代の生業は農業であるが、純農村地域以外では農間余業が多くあり、稲作以外のものが収入源となっていた。その1つが炭の生産であり、箱根竹や薬種である茯苓を採集して生活した。炭は焼き出されて熱海へ津出しされ、そこから江戸へ運ばれた。また、川口家の小作預口帳・年中日雇帳・当座帳によって経営を知ることができる。

F金融関係史料では借金証文・土地売買証文が中心であるが、農村経営での不足金は阿波(徳島県)の商人である鹿島屋からも借り受けている。これは丹那村ばかりではなく、6か村の土地を担保に借用している。江戸時代、地方に金融機関はなく、鹿島屋は沼津に出店し、紀州御用商人などを任せ、江戸にも支店を出し金融を拡大していった。伊豆の鹿島屋関係史料の、徳島にあるものは幕末に集中している。農村金融のあり方を探るため、今後とも鹿島屋関係史料の蓄積が重要である。G交通関係に分類したものには朝鮮通信使関係のものも多く、宿場へ出役する側から見た通信使の実態を掴む好史料である。I災害、J文学、K宗教関係史料を分類、最後にX川口家の家に関する史料、そしてZその他史料を集めた。X川口家関係史料には多くの日記が残された。内容は晴雨日誌となっているものが多いが、中には当時の世相を伝えるものもある。また、交通関係史料の中には地頭酒井氏に従って京都二条城に行った記録もあり、江戸・京都へ代官としてたびたび出張している。

近代史料については特に分類のきまりを作ったものがないので、川口家については行政・土地・貢租・土木・産業・金融・教育・情報に分類した。詳細を述べる紙幅はないが、明治維新时期に行われた地租改正の様子など貴重な史料が多数あり、今後の活用が期待される。



▲ 新版『伊豆国田方郡丹那村川口家文書目録』

所蔵資料紹介

推薦図書紹介

RECOMMENDED BOOKS

『条約改正交渉史—一八八七～一八九四』

大石 一男 著 [思文閣出版]

国際関係学科 川副 令



第二次伊藤内閣(1892-96年)の外相を務めた陸奥宗光の最大の事績が、日清戦争時の強硬外交と、第一次条約改正の二つであったことは、周知の事実だろう。ところが、「陸奥外交」の名を高らしめたこの二つの事績の相互関係は、従来必ずしも十分に論究されてこなかった。

本書は、日清戦争の評価如何にかかわらず条約改正は成功であったとする通説的な考え方を、丹念な史料分析によって、一步一步突き崩していく。論述の中核を成すのは、第一次伊藤内閣外相大隈重信が採用した交渉戦略(個別交渉と破棄戦術の組み合わせ)の画期性、一時成功するかに見えた大隈交渉が挫折するに

至った原因、大隈の戦略が陸奥へと形を変えて受け継がれるまでの経緯、そして陸奥による条約改正交渉の偶発的始動とその結末である。

以上から導かれる結論は、陸奥外相による対英条約改正交渉の失敗こそが、一方で致命的な瞬間に英国の態度を硬化させ、他方では第四回帝国議会以来継続していた日本国内の政治的分裂状況をいよいよ激化させて、伊藤博文首相も陸奥自身も望んでいなかったはずの対清強硬路線採択を(体制維持と国内紛糾解消のために)余儀なくさせたばかりでなく、対清開戦を念頭に置いた英国との協調確保のために当初望んだ対等条約案からの際限なき後退をも不可避にした、という大胆なものである。

『マイ・ドリーム —バラク・オバマ自伝』

バラク・オバマ 著/白倉 三紀子・木内 裕也 訳 [ダイヤモンド社]

国際文化学科 北岡 和義



バラク・オバマ大統領はブッシュ時代を全否定するような勢いで、次々と政策転換を打ち出している。プラハの演説で核無き世界をめざすと言い、原爆投下に対する米国の道義的責任に言及したのは、まさに変化したアメリカを印象付けた。

オバマという政治家の人格の源泉を探る、という意味で、本書はブームに乗った書店に並ぶ“オバマ本”に比べ群を抜いて面白くかつ感動である。

本書の初版は1994年、オバマ33歳の年、この若さで自伝というのも驚き。オバマが黒人で初のハーバード大の学生法律雑誌『Harvard Law Review』の編集長になったことがきっかけで出版社からアプローチがあった。原題『Dreams

from My Father』、翻訳本は全編543ページ。

「父の肌はタールのように黒く、母の肌は牛乳のように白かった」と書くオバマの出自。優秀な留学生だった父はオバマ2歳の時、家族を棄てて故国に戻った。母と祖父母に育てられたオバマの“ケニヤ、自分探しの旅”は涙流さなくて読むことができない。

迫害され、差別されてきた黒人への深い共感、弱者への思いやりがオバマを政治へ向かわせた。奴隷のルーツを持つ才媛、ミッシェル・ロビンソン弁護士との出会い、結婚。連邦上院議員1年生からいきなり大統領選に出馬、圧勝した。本書にオバマを発見したアメリカの理想と現実を読む。

『地球の水が危ない』

高橋 裕 著 [岩波書店]

国際交流学科 山中 康資



人間にとって、水はなくてはならないものである。ところが、開発途上国では、生活に必要な最低限の水の確保に困窮している多くの人々がいる。また、水の取り合いで国際紛争になることもある。

本書は、世界各地の水問題の現状を報告し、その危機的状況を訴えたものである。すなわち、アジア・アフリカ諸国での極端な水不足と水汚染、世界各地での大洪水の頻発、国際河川流域での水の配分をめぐる対立や紛争の激化など、さまざまな状況が詳しく報告されている。また、このように深刻化する水問題は、膨大な食糧輸入などを介して世界の水環境に大きな

影響を与えているが、日本にその責任の一端があるのではないかと問題提起している。

著者は、国連大学上席学術顧問、東大名誉教授であり、「水」に関する世界的権威である。現在、国内外の治水、水質汚染、水不足、洪水、水関連の紛争など、幅広く研究を行い、多くの提言を精力的に行っている。

本書で紹介されている多くの具体的な事例に触れることは、今後の国際問題の内容をより深く理解するための手助けとなることうけ合いである。また、21世紀最大の問題の1つともいわれる水問題についての必読書となるであろう。是非一読されることをお勧めする。

『リレーションシップ・マーケティング—ビジネスの発想を変える30の関係性』

E.グメソン 著/若林 靖永・太田 真治・崔 容熏・藤岡 章子 訳 [中央経済社]

国際ビジネス情報学科 藤沼 智行



周知のように、近年、一般消費者間におけるインターネットの普及、浸透によりマーケティングの手法も大きく変化してきている。例えば、One to OneマーケティングやCRMといった手法は、その典型的なものであり、双方共にその発想の基盤にはリレーションシップ・マーケティングといったものがある。リレーションシップ・マーケティングとは、リレーションシップのネットワークにおけるインタラクションを重視したマーケティングである。

元来、マーケティング活動の主眼は、市場創造分析と市場創造戦略に置かれてきた。とりわけ、後者のマーケティング・ミックスにみる4Pは学問分野に限らず、広く実務分野でも共通認識

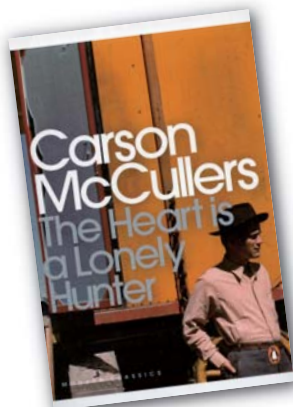
となっており、そこには、顧客ニーズからの視点が大きく作用していることはいうまでもない。

しかしながら、本書の特徴は、その既存概念からの脱却、即ち、顧客ニーズだけでなく多様なステークホルダーとのリレーションシップの重要性、加えて、それがマーケティング成果に与える影響について体系的に明確化させているところにある。更に、ビジネス・シーンにおいて有効とされる具体的な30のリレーションシップの詳細が分かりやすく紹介され、定義されている。近い将来日本経済の原動力として実社会に羽ばたく学生諸君にとって、今後のマーケティングの方向性を見極める目を養うという意味でも、是非一読していただきたいお薦めの傑作となっている。

『The Heart is a Lonely Hunter』

Carson McCullers 著 [Penguin Books]

商経学科 松井 洋子



この作品は1930年代後半のアメリカ南部の小さな町を舞台に、人間の孤独を描いた女流文学者カーソン・マッカーズの出世作といわれている。1960年代後半に映画化され、『愛すれど心さびしく』という邦題で日本でも公開された。

主人公のジョン・シンガーは耳が不自由であったが、読唇術で他者の「言葉」は理解できる。けれど彼が心を許せる唯一の友は、精神病院に送られてしまった同じく音の世界のないアントナポロスだけであった。彼はその友との面会を楽しみに、病院に近い町に移り、ある一家に下宿する。そこの思春期の娘ミック、酔っ払いのジェイク、カフェの主人ピフ、黒人の医師コーブ

ランドは、シンガーに心を打ち明け、皆、理解者を得たと錯覚してしまう。しかし友の死によって、心の拠り所を失ったシンガーは、4人が慕っているにも拘らずピストル自殺してしまう。だれも彼の孤独を理解するものはいなかったのだ。

それぞれの孤独の苦しみが癒されないまま言いようの無い挫折感のある作品なのだが、私が大学4年生のゼミでこの作品を読んで以来年を重ねた今、読み返して改めて作品の深さに触れることができた。明日を信じて進んでいる学生の皆さんにまずこの本と出会っていただいて、人生を振りかえるときには是非読み返してみたいと思う。

『ルポ 貧困大国アメリカ』

堤 未果 著 [岩波書店]

食物栄養学科 神戸 絹代



サブ・プライム問題に端を発した金融混乱、肥満、医療制度、ワーキングプアなど今アメリカが抱えている問題や状況を報告した本です。この中で職業柄、特に目を引いたのは「フードスタンプ」や「無料給食プログラム」で、この制度は連邦政府が低所得者に対して行っている社会保障の1つです。一般に肥満は過食、飽食、運動不足等が原因と言われていますが、アメリカではこのフードスタンプや無料給食プログラム受給者に肥満が増加しつつあります。何故低所得者が？と疑問に思われますが、貧困層の人々は栄養に関する知識も持ち合わせず、支給されたスタンプで少しでもお腹が一杯になるためにジャンク

フードの購入や無料給食プログラムでは「マカロニ&チーズ」、栄養価のないインスタント食品などを利用します。これにより栄養不足による肥満から健康問題、医療費問題や学力低下につながり、さらに貧困へとつながるという悪循環を生んでいます。これでは何のために福祉なのか？と疑問を持ちます。日本でも、派遣切り、介護保険制度、後期高齢者医療制度、医療費高騰など問題は山積しています。メタボ対策や子供の頃からの正しい食習慣を見につけさせるために「食育」が始まっています。何につけてもアメリカの後を追う日本が、二の舞にならないためにはどうしたらよいか考えさせられる1冊です。

国際機関資料室から

INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER

開催

日・EUフレンドシップウィーク2009

EU加盟の北欧3国 スウェーデン・フィンランド・デンマーク ～福祉・教育・環境を学ぼう～

EU情報センターを設置している国際機関資料室では、毎年5月9日のヨーロッパデーを記念して、日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は、5月8日(金)～5月21日(木)まで、図書館2階国際機関資料室閲覧室内にて、「EU加盟の北欧3国 スウェーデン・フィンランド・デンマーク ～福祉・教育・環境を学ぼう～」というテーマで展示会を開催しました。

近年注目されている北欧諸国の福祉や教育、環境を取り上げ、当館で所蔵する関連図書やEUから送付された資料、OECD等から情報を集め、各国の比較データなどわかりやすく展示、また、ムーミンやサンタクロース、オーロラなど楽しい話題の紹介もしました。

観光局などから取り寄せた3国の美しいポスターを展示し、観光ガイド・地図、また、駐日欧州委員会から送付されたEUに関する資料も配布し、好評でした。

恒例の食文化紹介コーナーでは、スウェーデンのコーヒープレイク「フィーカ」を紹介し、来場者にはスウェーデンのジンジャークッキーとアイスコーヒーまたはアイスティーで実際にフィーカしていただきました。会場の中心に大きなテーブルと椅子を設置し、関連図書や雑誌、料理本やレシピなどを見ながら、スウェーデンらしいゆったりとしたコーヒープレイクを体験していただくことができました。

また、フィンランドを舞台にした邦画「かもめ食堂」(2006年公開)のDVDを上映、バックミュージックとして、インターネットからダウンロードしたスウェーデンのラジオを流し、北欧の雰囲気を味わってもらえるようにしました。

今年も来場者には、EUやテーマに関するクイズに答えていただき、EUから送付された特製ボールペンや国際機関資料室オリジナルのかど消ストラップ等を景品として配りました。

15号館1階通路では、EU加盟国中12か国のポスター展示を行いました。それぞれの国の名所や特色を活かした美しいポスターに多くの学生が魅了されました。

今後も多くの方にEUに触れ楽しんでいただけるようなイベントを積極的に行う予定です。来年のイベントに関するご意見やご希望等ありましたら、お気軽に国際機関資料室の担当者にお申し出ください。お待ちしております。



▲ フィーカでくつろぐ学生



▲ 来場者の様子



▲ ポスター展示

インフォメーション

INFORMATION

大学生活を快適に過ごすための極意＝DVD『情報の達人』の紹介

第1巻

図書館へ行こう！
(インターネット時代の
情報活用入門)

図書館で情報を入手する方法
や活用方法を実感しよう！

第2巻

ゼミ発表をしよう！
(テーマ選びから
プレゼンテーションまで)

ゼミ発表の情報活用の手順と
方法について解説する。

第3巻

レポート・論文を書こう！
(誰にでも書ける10のステップ)

レポート・論文を作成する具体的
な手順と方法について解説する。



▶ 図書館内でご覧いただけます。

日本大学国際関係学部図書館報
BIBLIOTHECA

第5号

通巻第150号

発行日／2009年10月1日
編集・発行／日本大学国際関係学部
図書委員会

<http://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/>